

「赤字膨らむ静岡市立清水病院 医師確保に苦慮」

(朝日デジタル 2016年4月17日 09時13分 野口拓朗)より引用

シリーズ: 特集

## 赤字膨らむ静岡市立清水病院 医師確保に苦慮

野口拓朗 2016年4月17日 09時13分



静岡市清水区で最大の市立清水病院  
＝清水区宮加三



静岡市立清水病院(同市清水区宮加三)が厳しい経営に苦しんでいる。常勤医師の退職で収入が減ったのが主な原因で、病院会計への市の助成総額は年30億円にもなる。若手医師の確保のために医学生に学費を貸したり、高度な医療機材を導入したりするなど、収支改善に躍起だ。

病院は清水区南部の丘陵地に立つ。1989年に完成した今の建物は地下1階、地上7階。旧清水市時代の33年に開設された区内の基幹病院で、ベッド数475床を擁する。

年間の患者数は外来約20万人、入院約13万人。入院や手術が必要な重症患者に対応する2次救急医療機関であり、県から災害拠点病院にも指定されている。

そんな病院に暗雲が立ちこめたのは2年前。内科、外科など26科に常勤医師が71人いたが、14年3月末、心臓病などを担当する循環器内科の常勤医師3人が開業などに伴い、退職した。

3カ月後には、人工透析などを担う腎臓内科の常勤医師2人が開業のために去った。非常勤医師のやりくりで、外来の診療は続けているが、両科の入院受け入れができなくなった。

心臓を患い循環器内科の診察を待っていた区内の男性(77)は「今は入院の必要がないと言われているが、万一入院となったら他の病院を探すしかない。早く医師を補充して入院できるようにしてほしい」と話す。

医師1人当たりの年間の「売り上げ」は1億～1.5億円ともいわれる。5人の退職で、清水病院の診療、検査などの医療収入は13年度の約98億円から14年度には約92億円に減った。

病院会計の赤字を穴埋めする市の一般会計からの補助金は、13年度の約3億円から14年度は約18億円に急増。医師退職による減収に加え、会計制度の変更で職員全員が退職した場合の退職金総計約30億円を分割計上するようになったため、赤字が膨らんだからだ。補助金は昨年度約23億円、今年度は約16億円を見込む。

さらに、市は法律に基づき、公立病院としての救急医療や高度医療の提供に対する「負担金」を病院に支払わなければならない。補助金と負担金を合わせた総額は5人の退職前の年約17億円から31億～35億円に膨らんだ。

「市民の安全に直結する病院の経営に危機感を抱く」との声も市議会から上がるが、清水病院は清水市時代から赤字に悩んでいた。旧静岡市との合併直前の02年度は約9億円の赤字。合併後は赤字幅を徐々に縮め、黒字になったこともあった。しかし、医師5人の退職が痛手となった。

医師の確保に向け、病院関係者や田辺信宏静岡市長は退職者の出身母体の慶応大や北里大に医師の派遣を要請している。しかし、全国的な医師不足や最先端の医療を経験したいという医師の大都市志向などがあって、容易ではないという。

そこで清水病院は昨年度から医学生への修学資金貸与制度を始めた。月25万～37万5千円を貸し、卒業後、清水病院で貸与期間分勤務すれば、返済を免除する。医師の卵たちに好印象を持ってもらい、勤め先にしてもらおう狙いだ。

昨年度は医学部6年生3人、4年生2人、1年生1人の計6人が利用した。今月から、大学を卒業した6年生3人が研修医として清水病院での勤務を始めた。今年度も新たに4人の貸与枠を設けた。

病院は「経費削減よりも収入を増やそう」と知恵を絞る。今年度は骨折などで入院した患者のリハビリを担当するスタッフを3人増やし、利用拡大を目指す。脳やせきついなどの病変を探るMRI(磁気共鳴断層撮影装置)を1台から2台に増やし、検査利用者を増やしたい考えだ。

糖尿病などで通院している男性(68)は5年前、腸閉塞(ちょうへいそく)のため、救急車で清水病院に搬送されたことがある。「死ぬかと思ったが、助けてもらった。病院には恩義を感じているし、頼りがいもある」と語る。病院幹部は「安定的・自立的な経営と公的病院としての使命の両立を果たしていきたい」と話す。

<アピタル:ニュース・フォーカス・特集>

<http://www.asahi.com/apital/medicalnews/focus/>(野口拓朗)